

29【B】0935

これからの医薬品情報学: 医薬情報コミュニティの構築と Clinical-QSAR の試み Pharmaceutical Information Sciences in Future: e-Society for Drug Information and Clinical QSAR

○山内 あい子¹, 中馬 寛¹(¹徳島大薬)

市民からの情報が科学・技術の進歩のために効果的にフィードバックされる社会のしくみを作るため、我々は、インターネット上の知的共有基盤を通じて医療消費者・医療従事者・創薬研究者の間で医薬品安全性情報が効果的に循環する社会システムとして、医薬品安全性情報コミュニティの構築を目指している。先導研究として既に、絶対に起こしてはならない医薬品の副作用の一つである薬物催奇形性に注目し、臨床症例情報や化学構造情報を含む双方向・成長型の試用データベースを作成している。薬物催奇形性情報ネットワークの人的基盤とインフォマティクス基盤の整備による情報の成長は、根拠に基づく医療の実践と効率的な医薬品研究開発に資するだけでなく、リスクコミュニケーションに寄与する情報医療薬学分野の人材養成にも役立つものと期待している。これからの医薬品情報学分野では、貴重な臨床データから未知薬物の副作用を予測するために、計算法学的手法の積極的な導入が望まれる。妊婦や授乳婦の薬物治療における医薬品安全性情報は、胎児や乳児のリスク管理においても極めて重要であるが入手できる情報は希少である。そこで、ここでは、定量的構造活性相関(QSAR)手法を用いたヒトにおける薬物母乳移行性の解析・予測の例を示す。このようなヒトのデータを用いたQSARの臨床面への応用は、今後さらに、“*Clinical QSAR*”として多岐にわたり発展していくものと予想される。本研究は、科学技術振興機構の戦略的創造研究推進事業・社会技術研究プログラムに基づいて遂行されている。